

A cityscape at sunset with a dark sky and illuminated buildings. The sky transitions from a deep blue at the top to a bright orange and yellow near the horizon. The city below is filled with numerous buildings, many of which have their lights on, creating a dense pattern of small white and yellow dots. A prominent, tall, dark building with many lit windows stands on the right side of the frame.

駒込殺人事件

上卷

東大寺 茂

〜鞭聲（べんせい） 肅々夜河をわたる

暁に見る千兵（せんぺい）の大牙（たいが）を擁するを

遺恨なり十年一劍（いつけん）を磨き

流星光底（こうてい）長蛇（ちようだ）を逸す

朗々と吟じ終えた詩吟「川中島」が終わると、盛大な拍手が巻き起こった。

鬼沢道太（おにさわどうた）はテーブルの左右に座る一同を満足げに見渡し、椅子にどっかりと腰を落とした。

今日十二月二十日は鬼沢道太の七十歳の誕生日。古希を迎えた記念すべき日であった。

J R 駒込駅から徒歩五分ほどの本駒込六丁目にある自宅には、古希を祝つての夕食会にすでに結婚している三人の子供たち家族が集まっていた。

「いっお聴きしてもお父さんの詩吟は素晴らしいですね！」

テーブルの左中ほどに座っている長男の悟（さとる）が、身を乗り出すようにして賞賛の声を上げた。

「ほんと、いっ聴いても心に染み渡っていくわね！」

その前に座っている長女の美羽（みわ）が目を輝かせながら相槌を打った。

「そうでしよう。お父さんの詩吟は年季が入っていますからね」

子供たちの反応に安心したような顔付きで、道太の向かい側の席に座っている妻の真由美（まゆみ）が左右に視線を投げかけた。

「でも、龍（りゅう）に聴かせてやれなかったのが残念ですね。古希のお祝いだというのに欠席するなんて、なんて奴なんでしょうね」

右側の席に座っている次男建次（けんじ）が、その場の雰囲気の水を差すようなことをいった。

「ワシのことより大事な発表会があるらしいからな！」

そんな次男を睨みつけるようにして、道太は持ち前の威圧するような声を張り上げた。

三十三歳で独身の三男の龍はパリに在住している。東京の美術学校を卒業してすぐパリに留学し、その後もパリにとどまり、一流の洋画家を目指しているのである。そのため、毎年開催している道太の誕生日に欠席することも多く、今回の古希という記念すべき会にも仲間と共催する作品発表会のため出席できないと数日前に連絡してきたのだった。

「さあー食事を続けましょう。みんな沢山食べてね」

とげとげしくなりかけたその場の雰囲気や和らげるように、真由美は孫たちに笑顔を投げかけた。孫は四人。四十一歳になる長男と三十七歳の長女それぞれ二人の子供たちである。上は十二歳、下は九歳になる。三十九歳になる次男も結婚しているが子供はいない。

夕食が始まって一時間後の詩吟で食事の手が止まった一同は、再び食膳に運ばれてきた料理に舌

鼓を打ち出した。料理は赤坂の一流料亭から特別に頼んできてもらった板前の手になる日本料理である。

五代將軍綱吉の側用人として權勢を振るつた柳沢吉保（やなぎさわよしやす）が下屋敷として造園した大名庭園である「六義園（りくぎえん）」の裏側に当たる一角は、東京でも有数の高級住宅街である。付近には名のある政治家や財界人が住まいしている。

鬼沢道太がその一角に住まいを持ったのは五十歳、衆議院議員になって四期目のときであった。それから二十年。いまや政權与党国際党内で押しも押されぬ重鎮的存在である。

二十八歳で結婚した妻真由美は、一流電機メーカーの社長の長女であった。その關係で次男建次は、その会社の本社経営企画室次長という重責を担っている。その妻明日香（あすか）は陶芸家で、三十六歳の若さで、都内百貨店で個展を開催するほどの腕前である。いくいくは自分の後継者にするつもりである長男悟には第一秘書をやらせている。その妻萌（もえ）は後援会の事務局を担当しているが、細かいところまで注意が行き届く才媛である。上野に住んでいる長女美羽は專業主婦で、夫松宮海（まつみやかい）は都内私立大学の准教授である。専攻は心理学である。

幼いときから厳しく躰けてきただけに、今の子供たちの立場に道太は満足であった。しかし、画家の道を進んだ三男の龍にだけは不満を抱いていた。

三男にも政治家の道を歩ませ、いくいくは都知事に挑戦させてやりたかったからである。長男は国会議員。三男は都知事。それが、道太が描いていた晩年の理想の姿だった。

しかし、三男は頑として耳を貸さず、親に黙って美術学校に入学し、父親を避けるようにパリに

渡ってしまってしまったのである。

「やっと中国事業を縮小したようだな」

半分飲み干したピールのコップをテーブルに置いた道太が建次のほうにいかつい顔を向けた。

「ええ、広州にある工場をベトナムに移転することになりました」

「ワシが中国がらみの事業を縮小したほうがいいといっただけからもう三年だ。とにかく打つ手が遅く、生ぬるいんだよ！ かつて中国はその賃金の安さから世界の工場としてもはやされ、日本を始め世界各国からの工場進出が相次いだ。それが、ここ十年で最低賃金が三倍にまで跳ね上がり中国で工場を持つメリットが急速になくなってしまったにもかかわらず、今度は十三億の消費市場の魅力に取り込まれ、政治的リスクがあることを忘れてしまった。いや、足元の利益に目がくらんで忘れようとした、といっただけかもしれない。

お前の会社を始め中国に進出している日本企業は、ワシがあれだけ中国に対する警報を発し続けてきたにもかかわらず、中国という国の本性に気づかず経営の屋台骨を預けてきた。尖閣問題でようやく政治的リスクを真剣に考えるようになり、一部企業では中国からのシフトを考え始めたが、あまりに鈍感すぎるんだよ！」

道太はテーブルの左右を嘗め回すように見渡した。

次男の建次始め子供たち夫婦は金縛りにあったように緊張した顔つきをし、小さい孫たちでさえ、ただならぬ雰囲気を感じたのか、身を縮こませている。

「何度もいってるが、中国という国に幻想を抱いてはいけません！ 政経分離だから経済は大丈

夫だ。経済成長が続き国民が豊かになれば、自ずと民主化は進んでいかざるを得なくなるだろう——こうした考えは間違いだ！ それは、数年前のレアアース禁輸や日本企業焼打ち——また、ちょっと言論の自由を口にしただけで、国家政権転覆扇動罪で投獄されている中国民衆の姿を見れば明らかなことだ。

共産党一党独裁——憲法で明文化されているこの体制が覆されない限り、政経分離や民主化推進はまやかしに過ぎない。奴らは共産党一党独裁を守るためにはどんなことでもする。三権分立が確立されていないあの国では、法律は奴らの意のままだ。法治国家という言葉など絵空事に過ぎない。甘い言葉に騙され進出した企業は、気づいてみると、最先端技術を盗み取られ、共産党が裏で扇動する労働者のストによる圧力で賃金アップを余儀なくされて競争力を失っていく。その結果、勝ち残るのは共産党が実質的に支配している国有企業だ。

奴らは利用するだけは徹底して利用する。そして、ポイ捨てる。

尖閣問題もそうだ。臆面もなく常識では到底考えられない嘘八百の理屈を並べ立て、自国領土だとの主張を変えず、領海侵犯を常態化している。国際党政権に変わり、わが党が厳しい立場をとり、アメリカとの安全保障体制を強化したからいいようなものの、あのまま政権交代せず青雲党政権が続いていたら、間違いなく尖閣は奴らの手に落ちていたに違いない。都知事が都の所有にしようとしたのは、奴らのそうした意図に気づいていたからだ。

いいか——共産党一党独裁が覆されない限り、いかにトップが替わり、友好的な態度を示したとしても、それは見せ掛けに過ぎない。中国三千年の歴史は謀略の歴史で、過去の歴史を否定して成

立した共産党政権もその点だけは受けついであるということ忘れてはならないんだ。残念ながら、奴らに比べて日本人は短期的な見方しかできず、何代もの先を見据えた謀略が得意な奴らにころつと騙されてしまうことが多すぎるんだ。お前の会社のトップも所詮サラリーマンだから、自分たちの在任中のことしか考えない。口では、中長期戦略などいいことを言ってるが、目先の利益に振り回されてるんだ。建次、お前も経営企画室次長という重責を担ってるんだ。もつとトップに迫らなくてどうするんだ！」

とうとうとしゃべり続けた道太は、最後に止めを刺すように建次を睨みつけた。  
ぐつと唇をかみ締めていた建次は何か言いかけたが思いとどまったように下を向いた。

真由美もいい気持ちが出来ていなかった。中国に対する批判はいつものことで慣れてはいたもの、たとえすでに引退はしているにせよ、父がトップを務めた会社をあしざまに言われたことが腹立たしかったのだ。

長男の悟はというと、またいつもの調子が始まったか、と心中で苦々しい思いをかみ締めていた。道太は党内でも指折りの反中派である。その批判の舌鋒は強烈で周りがやきもきすることはしょっちゅうである。そのためか、HPに敵対的ウイルスを送り込まれて改ざんされることがたびたびあった。その発信元を調べさせ、中国国内であることをつかんだ道太は、中国政府によるサイバー攻撃だとマスコミに発表し、それを否定する中国政府から反動右翼の戯言（ざれごと）、と批判されたこともあった。しかしそのことが益々中国に対する道太の敵愾心を煽り、いっそう批判の舌鋒を鋭くさせたのである。

悟は中国に対する認識は道太と共有する部分が多かったが、日中間の現状を踏まえ、もう少し言  
い方を工夫したほうがいいのにと内心では思っていた。しかし、なんでも自分の意を通さずにはお  
かない道太の前では、何一ついうことができなかつたのである。

二ヶ月前にもこんなことがあつた。道太の母校のOB会主催の会合に中国大使を招いて開かれた  
講演会の質疑応答時間に、道太が次のような発言をし、中国大使との間で険悪状態になつたのであ  
る。その発言は、「大使は、日中は今日的な問題にこだわらず大局的見地で相手を尊重し友好関係  
を深めるようにしなければならぬ、といわれたが、それは欺瞞ではないのか——。今日の両国の  
関係悪化の原因はいつに中国側にあることをお忘れではないのか。両国間の今日現在の一番大きな  
問題は、尖閣問題である。いかに中国が尖閣に対する領有権を主張しようとも、歴史的、国際法的  
に尖閣がわが国の領土であることに一片の疑いもない。その厳然たる事実を中国は素直に認めなけ  
ればならない。いたずらに詭弁を弄すべきではない。このことは、大局的見地以前の問題である」  
——というものだった。

それに対し中国大使は、「あなたのような偏つた考えの人に答える義務はわたしにはない」——  
と、硬い表情で一蹴した。

道太はそれに追い討ちをかけた。「わたしの考えが偏つていふというのなら、貴国は偏見のない、  
正義を全うする国なのか。数年前に起きた毒餃子事件の顛末はどうなったのか。いつの間にか責任  
をうやむやにしてしまつてゐるではないか。これは一例に過ぎないが、こうしたことを平気でやる  
国が、わたしの考えを偏見だと批判できるのか！」



この会合に同席していた悟は、大使の顔が怒りで紅潮し、演台に置いた両手がブルブルと震えるのを目の当たりにしたのである。

結局その場は、予想もしないあまりの展開にあたふたしていた事務局が間を取り持って納まったが、会場内は張り詰めた空気でシーンと静まりかえったのだった。

「海くん。君は学者だが、君なんかは中国に対してどう思ってるんだ」

黙りこんでしまった一同に鋭いまなざしを投げかけていた道太は、長女の夫、海に質問を投げかけた。

「中国ですか……」

大学で心理学を教えている松宮は、三十八歳の若さには似合わない、白髪が目立つ頭に手をやった。

「そうですね……お父さんのおっしゃるように一筋縄では行かない国だと思えます。口に出していることの裏に隠された本音を見極めることが極めて大切ではないかと思えますね」

「さすが心理学者だ。君の言うとおりなんだ。ところがわが国の外交官は奴らの甘言や笑顔に簡単に騙されてしまう。パンダに小躍りしている子供みたいに幼稚そのものといっている。ワシはそんな役人たちが歯がゆくてしようがないんだ！」

「そうでしょうね。わたしのような門外漢でもそう感じる人が多いですからね」

松宮は当たり障りがない返答をした。

学者の松宮にとって義父は退屈な存在だった。十二年前に結婚して以来、義父が還暦になってか

続きは  
完成版で  
お楽しみ下さい。